

郷土資料館だより

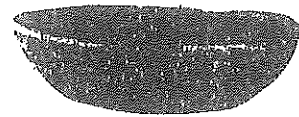
平成5年11月1日 発行

NO. 6

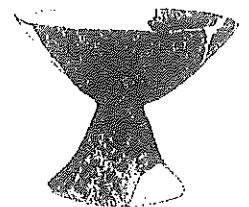
今回の郷土資料館だよりNO. 6は、前回に続いて古墳時代についてです。市内に点在している横穴群や、大規模な弥生時代の集落跡が検出された持田遺跡や沼間台遺跡から弥生時代の遺物のほかに古墳時代の資料が出土しています。今回は、古墳時代に使用された土師器や須恵器等の土器について説明をします。

古墳時代の特徴は、弥生時代に始まった農耕文化が普及し本格的な農業生産が進んだ時代で、経済力の上昇により身分の上下関係がさらに発達し、各地の村の統率者が、一般農民に対して支配者的な階級に就き、地方豪族に成長していきました。それらの豪族が自らの墓として大規模な古墳を築造していった時代です。逗子市内には古墳は築造されていませんが、同じ時代に造られた横穴が多く確認されています。横穴は、崖面や山腹に横穴を掘り込んで墓室をつくったもので、遺体を安置する玄室と玄室に続く通路の羨道から構成されるのが普通です。玄室には、家形に掘られた物やお棺を作っているものもあります。市内の横穴は、新宿や山の根に横穴群があります。横穴の中からは土師器や須恵器などの土器や玉類・直刀などが遺物として出土します。

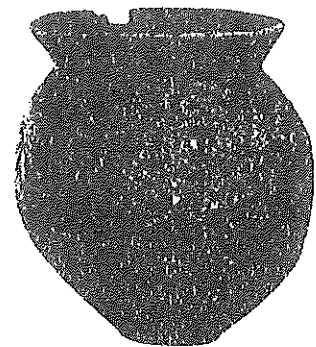
土師器は弥生土器の系統をひく素焼きの土器で、粘土紐を積み上げて土器を作る巻上法や輪積みなどの方法や、ろくろを使用して作る方法があります。土器の色は普通は黄褐色で、850℃前後の温度で焼かれて、つぎ たかつき はち つば かめ こしき 坏・高坏・鉢・壺・甕、すが 甑・などの器種があり、表面には文様はほとんどありません。写真1は、菅ヶ谷遺跡の住居跡から出土した土師器の坏です。写真2は、沼間ポンプ場南台地遺跡の住居跡から出土した土師器の高坏です。坏や高坏は、日常生活用具として食



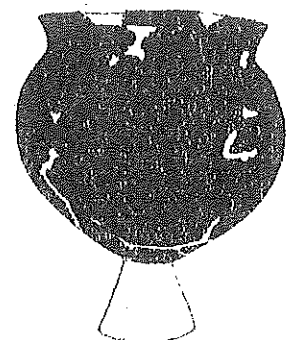
1. 坏



2. 高坏



3. 甕

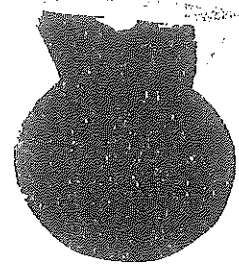


4. 台付甕

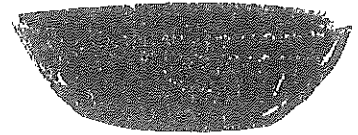
物を盛り付ける皿の役目をします。また、神への供物を盛る供献用の土器としての役目もありました。写真3は土師器の甕、写真4は土師器の台付甕で両方とも菅ヶ谷遺跡の住居跡から出土しました。甕はおもに煮炊きに使用されました。台付甕は脚台を付けておもに炉で使用しました。写真5は、菅ヶ谷遺跡の住居跡から出土した小型丸底の埴かです。埴は祭祀の時に使用された土器です。甌ひらべは煮炊き用の甕と組み合わせて使い、底に穴を開け小枝や葉っぱで底を塞いで食べ物を入れて蒸す、蒸籠むいろうの役目をしたものです。

須恵器は、朝鮮から渡来した技術で焼かれた土器で、窯を使用して1000℃以上の温度で焼かれ、灰色または灰黒色をしており、土師器と同じような形態の土器が造られています。須恵器の作成技術は、後に陶器の作成技術へと受け継がれていきます。写真6は、菅ヶ谷遺跡の住居跡から出土した須恵器の坏ひらべです。写真7は、新宿の横穴から出土した須恵器の平瓶ちようけいべです。写真8は新宿の横穴から出土した須恵器の長頸瓶さげべです。写真9は、新宿の横穴から出土した須恵器の提瓶です。平瓶・長頸瓶・提瓶ともに瓶の形態の違った物です。古墳時代には土師器と須恵器が使用されていましたが、一般の人々はおもに土師器の器を使用しており、須恵器は貴重品として一般にはあまり使用されないで、供献用として使用されることが多かったようです。

(文化財専門員 宮坂 淳一)



5. 埴



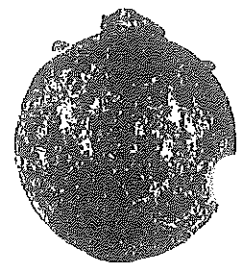
6. 坏



7. 平瓶



8. 長頸瓶



9. 提瓶



1993年(平成5年)11月1日 発行
逗子市郷土資料館だより NO. 6

編集発行者 逗子市郷土資料館

〒227-8581 逗子市磯山8丁目2275番

電話 0468-73-1741

© 逗子市教育委員会 1993